

6年3組の実践

乗富 智子(外国語科)

1. 6年3組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の共有

(1) 理解

児童は4年時から9つの資質・能力の指導を受けてきているが、それぞれの名称や定義などについての理解は不十分な様子であった。そこで、総合的な学習の時間において、児童が9つの資質・能力について理解を深めるための授業を行った。まず、それぞれが表す児童の具体的な姿の文言を見て、9つの資質・能力のうち、どれを表しているかを当てるクイズをした。また、児童に一番自分が身に付けられている、あるいは一番身に付けられていないと感じる資質・能力はどれかを問い、6年生としての1年間で自分が特に発揮していきたい資質・能力は何かを考えた。

また、これまでの学習で9つの資質・能力をつけるためにどのような学習をしてきたかを振り返る授業を行った。9つの資質・能力それぞれをどのような場面で発揮してきたかを話し合うことで、児童が学習方法に着目できるようにした。この授業では、児童に本年度の学校研究の概要を理解できる範囲で伝え、教師がめざす授業の在り方や児童の姿を共有した。

9つの資質・能力に関する授業を行ったことで、児童は自分たちのめざすべき姿を明確に理解することができた。この授業を機に、授業のみならず、学校行事や様々な活動の中で児童が9つの資質・能力をめあてに掲げたり、ふりかえりの中で用いたりするようになった。宿泊体験学習では、「ぼくたちは9つの資質・能力をつけるために頑張っています。」と学校の様子を紹介する児童がいた。9つの資質・能力を単に名称として記憶するのではなく、学校生活の中で育成し、発揮していこうとする児童の姿が見られるようになった。

(2) 意識化・省察

外国語科「自分の住む町や地域の魅力を伝えよう」では、9つの資質・能力のうち、評価する力、伝える力の発揮をねらった。CROWN Jr.は大単元(Unit)の構成をとっており、学期全体の学習の見通しをもつHOP、主に言語材料を学ぶSTEP、まとめ言語活動を行うJUMPという構成になっている。本単元はJUMPの学習であり、STEP(Lesson 1、Lesson 2)での学びを生かしてHOPで設定した1学期の学習のゴールに迫る。本単元は、自分の住む町や地域のことをよく知ってもらうために、地域の行事や施設・自然を紹介したり、紹介するものについて説明したりする語句や表現を用いて、自分の住む町や地域の魅力を先生や友達に伝えることをねらいとしている。なお、本稿では9つの資質・能力発揮のための手だてをUnit全体通して実践していることから、HOPで行った指導についても同単元の実践として述べることにする。

本時は単元の1時間目であり、学習の見通しをもつことをねらいとした。授業の冒頭で、本時は評価する力、特に「目標と照らし合わせて何ができるようになったか/何ができていないかわかる」を発揮することを児童と共有し、意識化を図った。児童は9つの資質・能力の名称から、めざす姿をイメージで捉えることが多く、具体的なめざす姿について誤った理解をしていることがある。本時では、めざす姿を児童と読み上げながら児童と共に確認することで、正しく明確に意識できるようにした。

評価する力発揮のために、本単元では主に三つの手だてを講じた。一つ目は、マイゴールの設定であ

る。1学期の学習のゴール「自分の住む町や地域の魅力を紹介しよう」は、共通のゴールとして1学期当初の学習（HOP）で児童に提示した。その際、1学期の学習のゴールと関連させて、児童一人ひとりに自分の目標とする姿を具体的に思い描くマイゴールを設定させた。二つ目は単元末の言語活動に一度挑戦する機会を設けることである。言語活動を一度声に出してやってみることで、今の自分にできること、できないことを児童が自覚できるようにした。三つ目はマイゴールに合わせた学習計画を児童が自分で立てていくことである。マイゴールを達成するために何をどの順序で学習するのかを児童が考え、学習計画を立てるようにした。

HOPの学習では、大単元の導入として、まず教師の住む地域について施設や自然の様子などを交えて英語で聞かせた。次に教科書誌面にある動画を児童と視聴した。それぞれどのようなことを言っているかを児童と確認した後、1学期の学習のゴール「自分の住む町や地域の魅力を紹介しよう」を児童に提示し、ここで「一度やってみよう。」と言語活動に取り組みさせた。これから学習する内容であるため、当然のことながら児童は何を言っているのか、どんな英語で言えばいいのかわからず、何とか自分の知っている単語をつなぎ合わせながら話そうとしていた。児童は、「英語の言い方がわからない。」「紹介するのに魅力的な場所が思いつかない。」「単語のつなぎ方がわからない。」など、難しかったことやできなかったことを挙げていた。その後マイゴールを設定させると、「自分の住んでいる地域を紹介する文を正しく相手に伝える」「間違えずに、すらすらと正しい発音で言えるようにする」など、正しさにこだわったマイゴールが多く見られた。そこで、「伝えた時に、相手にどんな気持ちになってほしいかを考えよう」と指導した。すると、「住んでみたい！と思わせる」「相手に自分の住んでいる場所の良さが伝わるように言う」「行きたいと思ってもらえるように明るく話す」など、伝える相手のことを意識したマイゴールへと変化していた。

HRT: It is Ishibiki shopping street. I live in Ishibiki. We have a shopping street in my town. It's an old shopping street. I think the shopping street is very good. It's not new. It's not convenient, but I like this shopping street very much. Why? Why do I like the shopping street?

STU1: 美味しいお店があるからだと思います。

HRT: That's good. This is a curry shop. It's delicious. Nice guess.

STU2: 何度も行っているから？

STU3: 珍しいものがあるからだと思います。尾張町商店街みたいに。

HRT: Good. I like the shopping street because I have my friends. They are very kind. I like them very much, so I like my town.

How about you? What is a good point in your town?

資料1 教師によるモデルと児童とのインタラクション

JUMPの学習では、マイゴールを確認した後にはまず教師の住む地域について英語で紹介した。単に地域にある施設を紹介するのではなく、その地域の魅力が伝わるように児童とのインタラクションを交えながら聞かせた（資料1）。地域の魅力とはどういうものか、自分の住む地域の魅力とは何かについて児童が十分に意識できたところで、言語活動に一度挑戦する機会を設けた。HOPでも同じ活動を経験しているが、HOPとは異なり、各Lessonでさまざまな言語材料を学んできたことから、児童はそれ

らを活用して話そうとしていた。以下は、A児の発話の様子である（資料2）。A児の設定したマイゴールは「相手に自分の住む地域のことを詳しく伝えて、行ってみたいと思わせる」であった。A児は自分の住む町は英語で言えたが、魅力と言えるものは何も思い浮かばなかった。何とか飲食店の名前を挙げたものの、特に行ったことも好きなお店でもなかったようである。A児は授業のふり返りで、「一回やってみて、反応などはできたけど、町のことを知れていなかった。どんなことを言ったら相手に行ってみたくかこんな場所があったのかと思わせるかという課題を発見した」（下線は筆者）と述べている。マイゴールと照らし合わせながら、今の自分にできたこと、できなかったことを自覚し、新たに発見した課題についても言及している。このことから、一度言語活動に挑戦する機会を設けることで、今の自分の学習状況を正しく評価し、次の課題を見つけることができるとわかった。

A児: I live in Itoda. …え、何もない、何もないよ。うーん、あ、ターバンカレー！
In Turban Curry. でも行ったことない。それしかないよ。

資料2 A児の発話の様子

6月19日（木）めあて 学習の見直しをもとう	学習すること ・一度やってみる ・計画を立てる ・先生の地域紹介を聞く
6月20日（金）めあて キーワードを出してそのキーワードの英語を覚えよう	学習すること ・何の魅力を伝えるかを定める ・その場所での一つ一つの単語を覚える
7月2日（水）めあて 文を作成して魅力が伝わるか確認しよう	学習すること 文を作って録音する
7月3日（木）めあて 先生や友達に自分の住んでいる地域の魅力を紹介しよう	学習すること 先生や友達に紹介する

資料3 A児の学習計画

言語活動に一度挑戦した後で児童はこれから自分が取り組むべき学習についてたくさん書き出し、資料3にあるような計画表にまとめた。学習計画を作成するにあたり、伝えたい内容と伝えるために必要な言語材料について、どちらを先に決めるべきかについて指導した。まず伝えたい内容を明確にし、それから必要な言語材料を選択する、という順序を確認し、児童は学習計画をそれぞれ考えた。A児の学習計画が資料3の通りである。A児は、言語活動に挑戦して発見した課題の解決に向けて、学習することの中に「何の魅力を伝えるか決める」と書いている。何を伝えたいのか、伝えたい内容を明確にした上で「文を作成して魅力が伝わるか確認する」という1時間のめあてを設定している。

授業の終末、児童に「授業の中で評価する力を一番発揮できたのはどこだった？」と問うと、児童は「一回やってみたところ」と答えていた。評価する力を育成するためには「一度やってみる」という学習方法が有効であることを児童とともに確認し、学習方法の一つとして記録することとした。

A児は、教師のモデルなどを聞いて、地域の魅力とは何か特別な施設や観光地だけではないこと、自分が楽しく過ごしてきた場所や身近な施設などでも十分な魅力となることに気づき、家の近くにある公園を紹介していた（資料4）。兄弟で仲良く遊んだ公園、春になると美しい桜が楽しめることも交え、住む地域の魅力をわかりやすく伝えることができた。A児の1学期のふりかえりには、「相手の人に行ってみたくと思わせるため本当に伝えたいことを考えて言葉を選ぶということができるようになった。（中略）自分の地域にはどんな魅力があってどんないい町なのかというのを考えて文章にすることができた。」とあった。自分で設定したマイゴールと照らし合わせ、自分の現在の力を正しく評価し、それに合わせた学習計画を立てることでA児はマイゴールを達成す

A児: I live in Itoda. We have a park in my town. We can enjoy soccer and dodgeball in the park. I play soccer with my brother. We can see Sakura in the park. It's beautiful.

資料4 A児の紹介の様子

ることができたと感じていた。

(3) 汎用化・見える化

国語科「みんなで楽しく過ごすために」では、1年生と一緒に遊ぶために、目的や条件に合わせてどんな遊びがよいかを話し合う学習を行った。目的を考える際、一緒に遊んだ時に1年生にどんな気持ちになってほしいかを考える「相手の気持ちを考える」という学習方法を共有した。また、外国語科「小学校生活の思い出」でも、マイゴールを設定する際、「相手にどんな気持ちになってほしいかを考える」という学習方法を共有した。学級内の掲示板に各教科等の学習で得た学習方法を付箋に記録して掲示しておき、複数の学習方法が集まった段階で、学習方法を汎用化する時間をとった。児童と汎用化する前に、付箋をキーワードごとにまとめておくことで、児童が汎用化する際のキーワードに気付きやすいようにした。国語科、外国語科の学習方法は、「相手のことを考える」ということが共通していたため、それをキーワードにして「目的を決める時に相手のことを考える」という学習方法にまとめた。汎用化した学習方法は、各教科等の付箋とは区別して掲示することで、児童が他教科や他の学習場面でも学習方法を活用できるようにした。

2. 成果と課題

年度当初に9つの資質・能力の「理解」の授業や学習方法に焦点を当てた授業を行ったことで、学校研究全体の方向性を児童と共有することができた。児童が学校研究について理解し、9つの資質・能力を発揮していこうとする姿勢が見られたことは大きな成果と言える。また、本時のねらいと9つの資質・能力発揮のための手立てを関連付けることで、外国語科として身に付けたい力と、発揮させたい資質・能力を一致させて指導することができた。

一方で、9つの資質・能力を発揮するための「汎用化」については課題が残る。各教科等で得た様々な学習方法を汎用化した文言に昇華させることは児童にとっては難しく、結果的に教師主導の指導となってしまった。同じキーワードの学習方法をまとめることは容易だが、共通のキーワードがない学習方法を整理する作業は6年生児童であっても難しかった。「汎用化」は他教科や他の学習場面で活用していく際に必要な段階であると理解できるが、児童の学びの過程において本当に必要であったのかは検証の余地がある。また、本研究では授業の初めに授業で発揮したい資質・能力を児童と共有することで、教師も児童もそれを意識しながら学習を進めることができた一方で、授業の中で発揮していた様々な資質・能力を児童が自覚できなかったという課題もある。先述した外国語科の実践では、児童は評価する力だけではなく、反応しながら聞く姿（聞く力）や、理想を実現するための具体的な方法を考える姿（課題を発見する力）、どのようにすれば解決できるか考えている姿（挑戦心）など様々な姿が見られた。参観していた教師からの動画メッセージで児童にフィードバックすることはできたが、児童自身が授業をふり返った時にどの9つの資質・能力をどのように発揮できたかを問うことで、さらに多様な学習方法を獲得できたのではないかと考える。発揮したい資質・能力をあらかじめ提示するといった帰納的な指導は、児童も教師も9つの資質・能力を明確に意識できるというよさがある反面、多様な資質・能力を発揮することを制限してしまったり、獲得できる学習方法が限定的であったりするという課題もあった。「意識化」「省察」の場面においては、指導者がねらいたい資質・能力を明確にすることに加え、「自分はどの資質・能力を発揮できたか、どのためにはどのような学習方法が効果的だったか」などを児童に問い、様々な資質・能力を発揮しながら学んでいることを児童自身が自覚できるようにすることが重要である。

6年2組の実践

森田健太郎(理科)・稲垣 宏樹(体育科)

1. 6年2組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の共有

(1) 理解

昨年度までの実践において、教師は9つの資質・能力の理解が進んだものの、児童との共有は十分にできていなかったという課題があった。そこで今年度は、まず児童自身が9つの資質・能力の意味を正しく理解し、自分のこととしてとらえられるようにすることから始めた。具体的な方策としては、4月から5月にかけて学級活動や朝の時間等を利用し、段階的な手だてを講じた。

まず、ワークシートに9つの資質・能力の名称を書かせ、その意味をどの程度理解しているかを確認した。多くの児童が名称を思い出せない、思い出せても具体的な姿までは説明できないことに気付かせ、学ぶ必要感を自覚させた。次に、9つの資質・能力の下位項目にある具体的な姿(例:「日常の中で『?』を見つけている」)を提示し、それがどの資質・能力に当てはまるかを考えさせる「9つの資質・能力クイズ」を行った。これにより、抽象的な言葉と具体的な児童の姿を結び付け、それぞれの資質・能力がめざす姿を明確にイメージできるようにした。さらに、ワークシートを用い、現時点で自分が1番得意だと思う資質・能力と、苦手だと感じる資質・能力を、その理由と共に記述させた(資料1)。

これらの活動を通して、児童からは「これまで、9つの資質・能力をそんなに意識しなかったから、書けるわけないと思った。これから1年間取り組んで、苦手を得意にしようと思う。」といった意欲的な記述が見られた。また、「自分と違う考えでも良さを見付けるのは、評価する力ではなく調整力ではないか」「好奇心の『?』が課題発見につながるのではないか。」といった、定義の細部に対する鋭い質問も生まれた。これは、児童が9つの資質・能力を単なる言葉としてではなく、本質的に理解しようとしている姿の表れであるといえる。

(2) 意識化・省察

児童が資質・能力を意図的に発揮し、自らの学び方を自覚できるよう、授業の導入で9つの資質・能力を提示し、活動を通してその有効性を実感し、終末で価値付けた。ここでは、6年理科「動物のからだのはたらき」における、拍動と脈拍について調べる授業を例に述べる。

授業の冒頭、教師は本時で重点的に育成する9つの資質・能力として「挑戦心(あきらめず、やりきろうとしている)」を提示し、そのための手だてとして「解決したい問いと、解決するための方法を自分で選ぶこと」を明示した(資料2)。これにより、児童は受け身の姿勢ではなく、「自分の問いを、自分の方法で解



資料1 かしわっ子につけたい9つの資質・能力

○自分がいちばん得意!と思う資質能力を赤色で塗りましょう。

その理由
私は人や物のこともよく見ることが得意(めい)で、見たことや感じたこと、聞いたことから課題を発見したり、助けたりすることができから。

○自分がいちばん苦手かも...と思う資質能力を青色で塗りましょう。

その理由
パソコンなどでうまく迷ってしまう、自分の気持ちが分からなくなったり、自己管理能力が弱いと思うから。

○今日の授業の感想を書きましょう。(わかったこと、気付いたこと、難しかったことなど)

この9つの資質・能力をしっかりと理解して意識して過ごしたいなと思いました。

資料1 理解で使用したワークシート



資料2 意識化

決する」という強い目的意識をもって活動に入ることができた。実際の活動場面では、児童一人一人が思い思いの方法で問題解決しようとする姿が見られた。「脈拍・拍動の運動による変化」を追究する児童の中には、その場で踏み台昇降をする子もいれば、より負荷の高いダッシュや縄跳びを選ぶ子もいた。また、「脈拍の場所」を探るために、聴診器を用いて心音と脈を同時に確認しようとする子や、自身の指先の感覚を頼りに触診を繰り返す子など、教室中に多様な探究の姿が広がった（資料3）。さらに、この「自分で選んで取り組む」という体験は、授業内にとどまらず、児童の生活へも波及した。翌日には、「祖父の脈拍を測ってみた。」「ペットの心臓の音を聞いてみた。」と報告に来る児童も現れた。これは、自ら選択した学習方法が、児童の知的好奇心と挑戦心を刺激し、学びを学校の外へと広げた結果であるといえる。



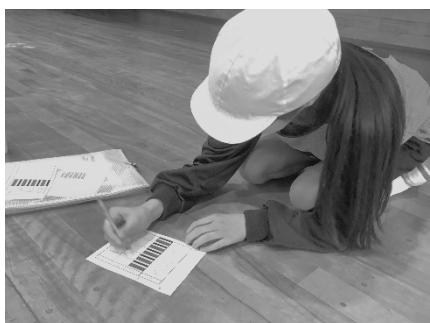
資料3 自分で選んだ方法で探究する姿

授業の終末では、実験結果の正誤だけでなく、「どのような学び方が『挑戦心』の発揮につながったか」をふり返った。児童からは、「自分で決めた方法だから、失敗しても違う道具を試そうと思えた」「知りたいことに合わせて方法を変えるのが楽しかった。」といった記述が見られた。教師はこれらの姿を価値付け、「解決したい問いや解決方法を自分で選ぶ」ことこそが、主体的に課題に向き合い、挑戦心を高めるための有効な学習方法であることを全体で確認した。

次に、体育科「ボール運動ゴール型 ハンドボール」の授業について述べる。本単元では、調整力を発揮するための学習方法の共有をねらった。

ボール運動ゴール型は、①ボールを運ぶ②シュートが打てる状況をつくる③シュートをするという3つの局面（以下局面①②③とする）において、攻守が入り交じりながら、技能を駆使し、得点を競い合うものである。本単元では、得点を取るためにボールを持たない時の動きの重要性に気付くために、特に局面②を焦点化させた。まず、教具の工夫として、得点しやすいようにゴールを台形とした。こうすることでシュートエリアが180°となり、ゴール前でフリーな状態を作り出してシュートをすれば、得点を取りやすくなる。これは、局面③の技能的な難易度を下げる上で有効な手だてとなった。また、エンドラインからボールが出た場合は、センターラインから再開することとした。このルールのおかげにより、局面①を軽減した。これらによって、局面②に児童の意識をより強く向けた。

単元を通して、調整力をつけるために、兄弟チームでゲームの記録を取り（資料4）、シュートをした場所の記録をもとに話し合わせた（資料5）。得点が決まった場面の動きについて、作戦ボードを用いて動きを可視化させたり、実際にチーム練習で確認したりした。そうすることで、得点につながる有効な場所の活用について考えることをねらった。



第 〇月〇日(日)			
名前	シュートを打った	得点	アシスト

資料4 ゲームの記録



資料5 話し合い

るために、ボールを持っていない時は空いているスペースに走りこんだり、ボールを持っている時はタイミングよくパスを出したりすることをねらった。

ゲーム①を終えて、ゲーム②に向けて各チームでの話し合いと練習の時間をとった。調整力を発揮するために、時間内にチームのみんなが納得できるように、チームとしての攻め方の共通理解を図ることを意識化させた。黄・オレンジチームの話し合いでは、A児がまだ得点を取っていないから、A児が取れるようにするためにどうしたらいいかという話し合いがなされていた。A児が得点を取ると全員得点のボーナス得点があるからである。話し合いは、A児が空いていたならA児にパスをするという結論に至った。本時の課題であるノーマークでシュートをするという意識はあまりないが、みんなが納得できる解決方法を見出そうとする姿が見られた。ゲーム②ではA児は得点することができ、狙い通りボーナス得点を取ることができた。

授業のふりかえりで、ノーマークでシュートをするにはどうすればいいかと全体に問うと、A児が「ゴールの両側のコーナーを活用する。」と答えた。意図としては、反対側のコーナーめがけて大きなパスをして守りを揺さぶり、ノーマークをつくるということである。これは、単なる個人の思いつきではなく、「自分がフリーになってパスをもらう（チームの目的を達成する）」ために、コーナーへ動くという手段を選択した姿であった。A児自身がノーマークでシュートをするということを意識していたということである。

「省察」では、調整力の発揮のための学習方法として、「共通の目的を明確にする」と共有した。これまでは、話し合いの場面で時間内にまとまらないことが多くそれぞれの思いつきでゲーム②に入り、個人の得点やチームの勝敗に意識がフォーカスされていた。目的が共有されないまま、話し合いが行われていたからである。青・水色チームは全員が得点を取るということをめざしていた。めざすべきゴールがはっきりすると、調整力を発揮しやすくなるのである。

(3) 汎用化・見える化

本研究では、一つの学習方法を単一の教科だけで完結させず、他教科からもアプローチすることで、学習方法の汎用性を高めていく。ここでは、理科と国語科をもとに例を述べる。

まず、前述の理科「動物のからだのはたらき」において、各自が選択した方法で追究した後の全体共有の場面では、教師は「意識化」として改めて情報の収集・整理・分析する力を提示した。その上で、個々の実験結果や調べた事実を整理し、そこからきまりを見いだすための手だてとしてシンキングツールを用いた。活動後の「省察」では、バラバラの事実から一つの結論を導き出せた経験を基に、児童と「考えの共通点を見付けるときは、シンキングツールが使える」という学習方法を確認した。

次に、国語科「集めて整理して伝えよう」においても、同様に情報の収集・整理・分析する力を「意識化」して単元を展開した。情報と情報の関係を整理する学習の中で、「複数の事象」と「そこから導き出される共通点」という構造に着目させた。その際、「Aは〇〇だ」「Bも〇〇だ」「したがって共通点は〇〇だ」という論を構築していく手段としてシンキングツールを活用させた。バラバラにある複数の事実から一つの共通点を見いだすためには、シンキングツールの利用が有効であることを実感させた。「省察」では、「情報と情報の共通点を説明するときには、シンキングツールが使える」と、理論的な側面から学習方法を再確認した。

こうした理科での「実践的な実感」と、国語科での「論理的な理解」を統合し、児童は「複数の情報

から共通点を見付ける＝シンキングツール」という汎用的な学習方法を見いだした。最終的に、この学習方法を「共通点はシンキングツールで見付ける」という言葉で定義し、教室掲示として「見える化」した。これにより、児童は教科を問わず、情報を分析する場面において、自らシンキングツールを選択・活用できるようになったといえる。

2. 成果と課題

本実践を通して得られた成果は、主に以下の2点である。

一つ目は、児童が9つの資質・能力を抽象的なスローガンとしてではなく、自らの学習と関連させ、主体的に発揮しようとする姿が見られたことである。年度当初、児童にとって曖昧であった定義を、クイズ形式や自己分析を通して自分事としてとらえ直させたことや、授業導入においてその発揮場面を具体的に示したことで、児童は9つの資質・能力を単なる言葉としてではなく、課題解決のための有効な学習方法として認識できるようになった。

二つ目は、他教科にわたり9つの資質・能力発揮のための学習方法を見出すことで、学習方法の汎用化を図れたことである。学習方法の有効性を、経験と論理の両面から実感し、それを「見える化」したことは、児童が課題解決に向けて最適な手段を自律的に選択・活用する一助となった。

三つ目は、9つの資質・能力発揮のための学習方法の共有が、個人の思考の深まりだけでなく、集団における協働的な学びの質を高める効果をもつことである。体育科の実践に見られるように、グループで一つの学習方法を共有したことで、グループ全体で活動の見通しをもつことができ、連携が高まる姿が見られた。これは、学習方法が単なる個人の学びにとどまらず、集団活動において互いに見通しをもたせる「共通言語」としての役割を果たし、他者と協働して9つの資質・能力を発揮する場面においても有効であるといえる。

一方で、本実践を通して得られた課題は、主に以下の2点である。

一つ目は、「意識化」により思考が9つの資質・能力の枠にとらわれてしまうことである。授業の導入で9つの資質・能力を明示することは、学習の見通しをもたせる反面、児童の思考をその枠内に留めてしまう側面があった。実際、児童が提示された9つの資質・能力の発揮を意識しすぎるあまり、活動が想定範囲内に収まってしまう場面が見受けられた。9つの資質・能力の育成においては、提示された9つの資質・能力への当てはめだけでなく、活動の中で生まれる自由な発想や試行錯誤のプロセスも重要である。今後は、「意識化」が児童の自由な思考を妨げないように、導入や指導の工夫が必要である。

二つ目は、授業における「見取り」の在り方である。「設定した9つの資質・能力発揮のための学習方法が見いだせたか」の検証に重きを置くあまり、授業の見方が確認的な見取りとなってしまった。本来、授業には教師の想定を超える児童の姿にこそ価値があるが、あらかじめ設定された枠組みへの当てはめを優先することで、それらを十分に見取ることが難しくなっていた。今後は、検証的な視点だけでなく、児童の事実をありのままに見取る視点をもち続けることが必要である。

三つ目は、学習方法の精選についてである。全教科・全時数において網羅的に取り組もうとしたことで、見いだされる学習方法が多岐にわたった。その結果、児童がどの場面でどの方法を使えばよいか迷うといった選択の難しさや、定着しきらないまま次の方法へと移ることで、活用できなくなるという課題が明らかになった。今後は、児童の実態に合わせて学習方法を精選し、確実な活用につなげていきたい。